

戦史叢書

海軍捷号作戦

〈2〉

—フィリピン沖海戦—

防衛庁防衛研修所

戦史室 著

朝雲新聞社

昭和四十七年五月三十日 印刷
昭和四十七年六月十日 発行

戦史
叢書

海軍捷号作戦〈2〉

—フィリピン沖海戦—

定価二、九〇〇円

著作者 防衛庁防衛研修所戦史室

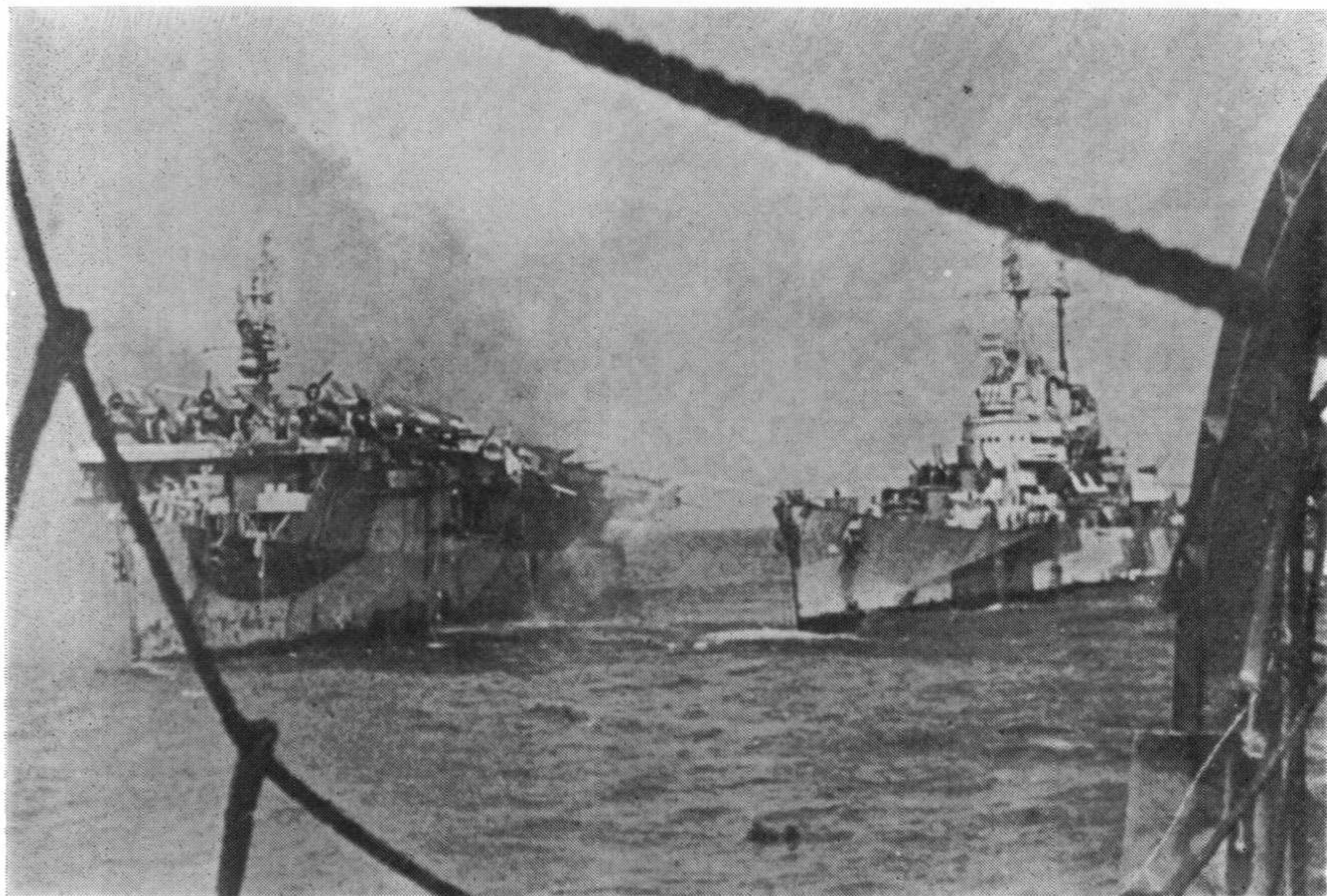
発行者 中 島 義 雅

印刷所 日放印刷株式会社

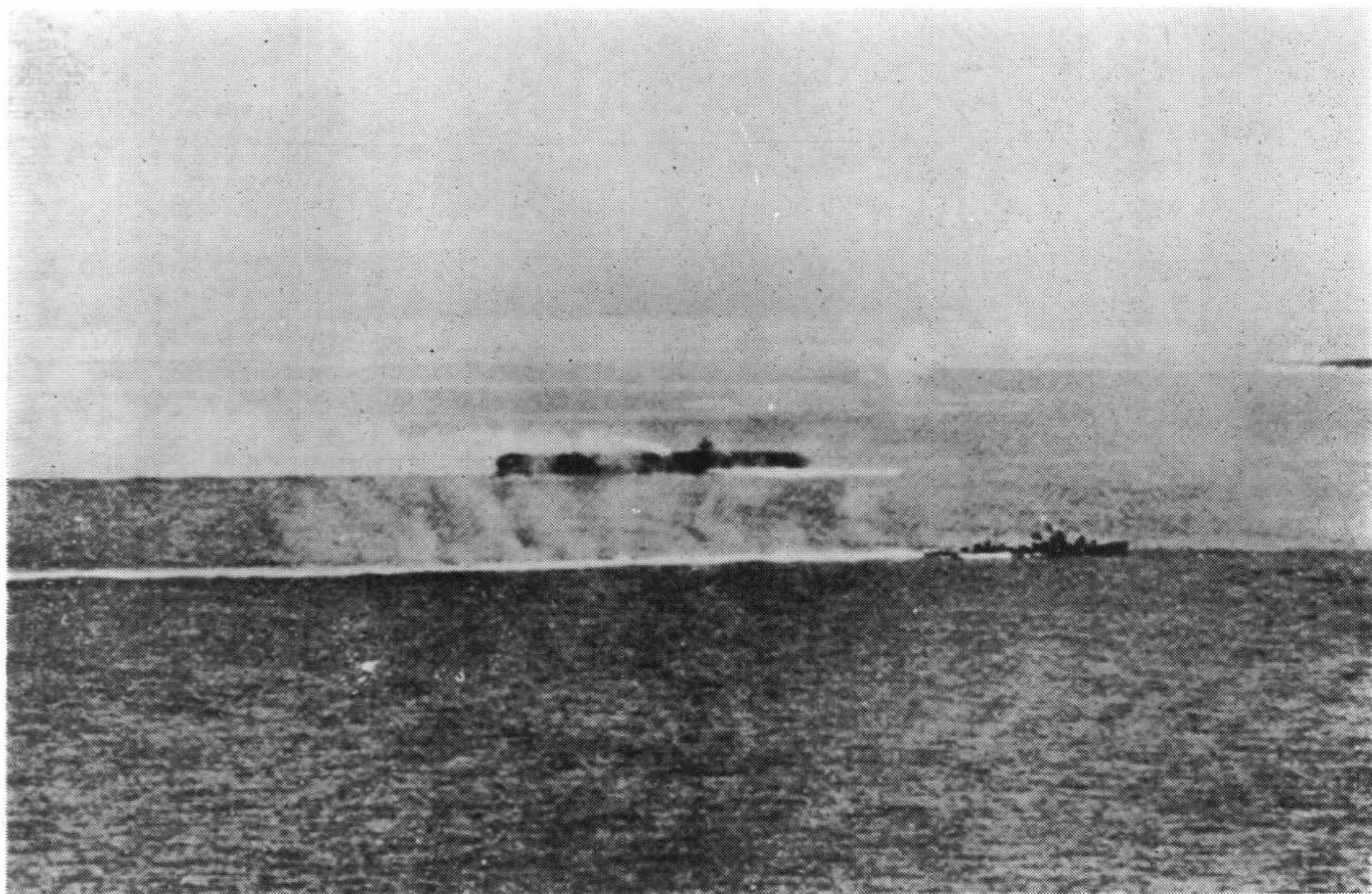
発行所 株式会社朝雲新聞社

東京都港区芝罘町九 光輪会館
振替口座東京一七六〇〇番
電話(436)〇二八七―〇二八八番

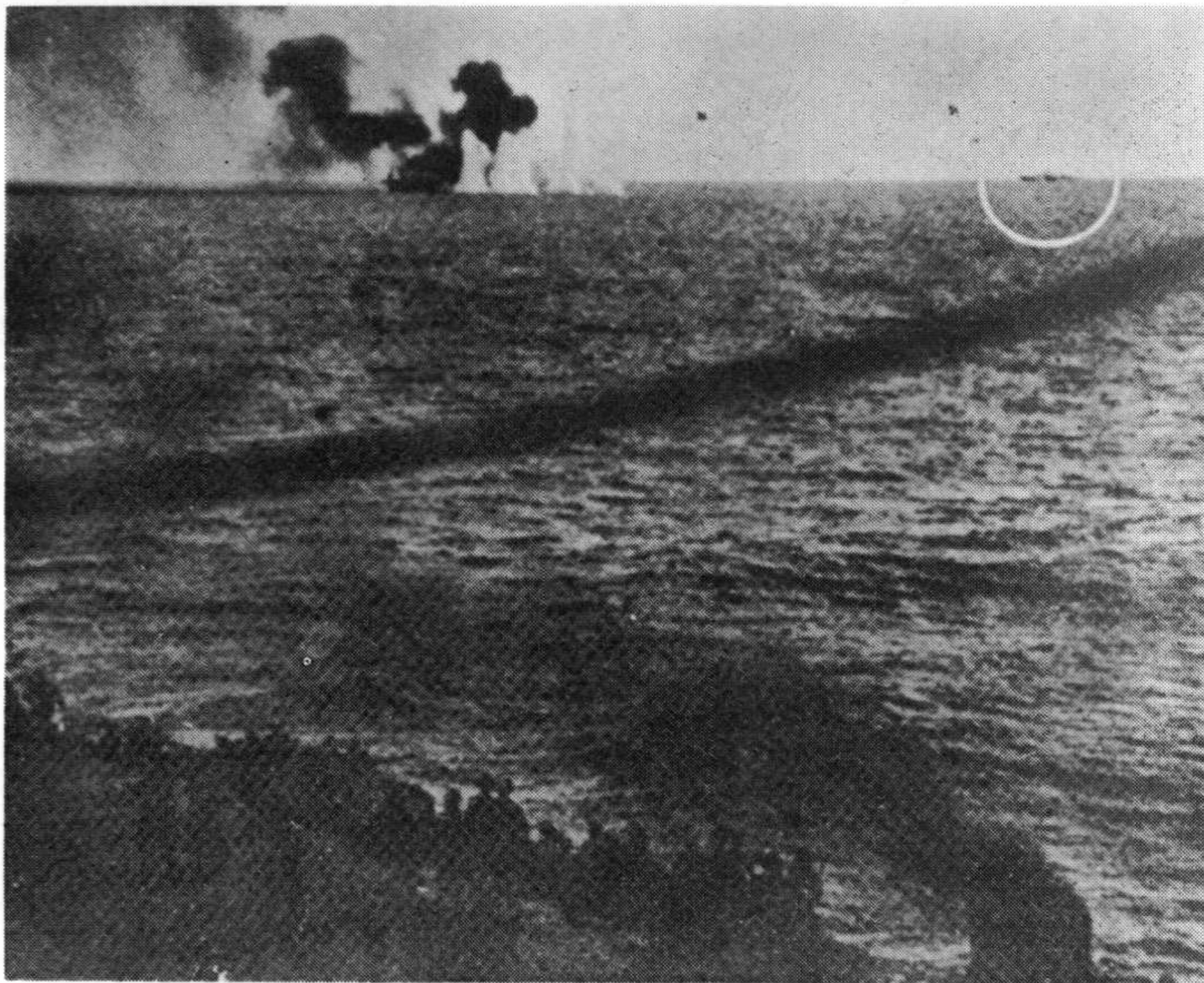
乱丁本落丁本はお取替えいたします



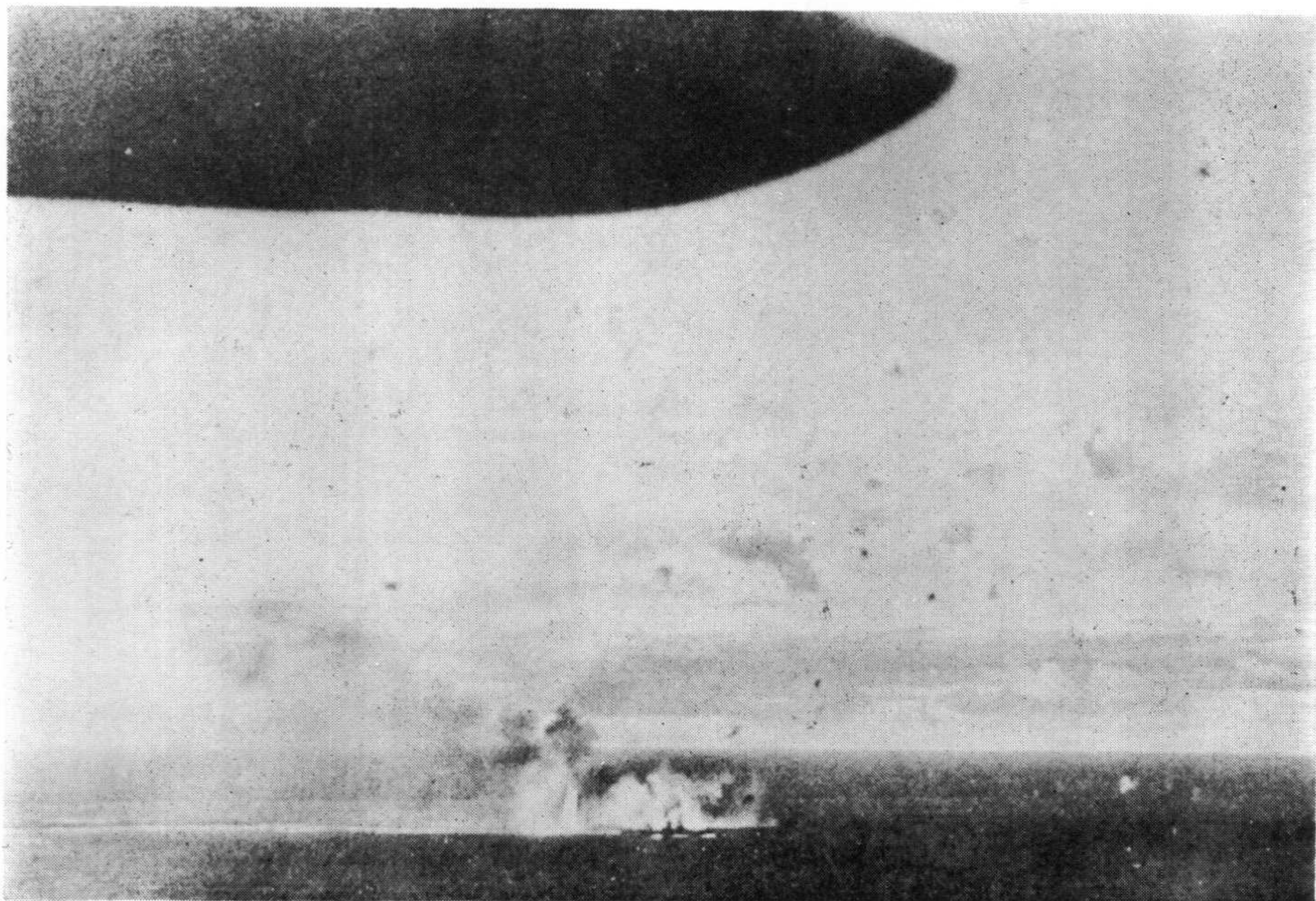
わが彗星艦爆の攻撃を受け炎上中の米軽空母プリンストン
 (昭和19年10月24日，フィリピン沖海戦—Official U. S. Navy photo)



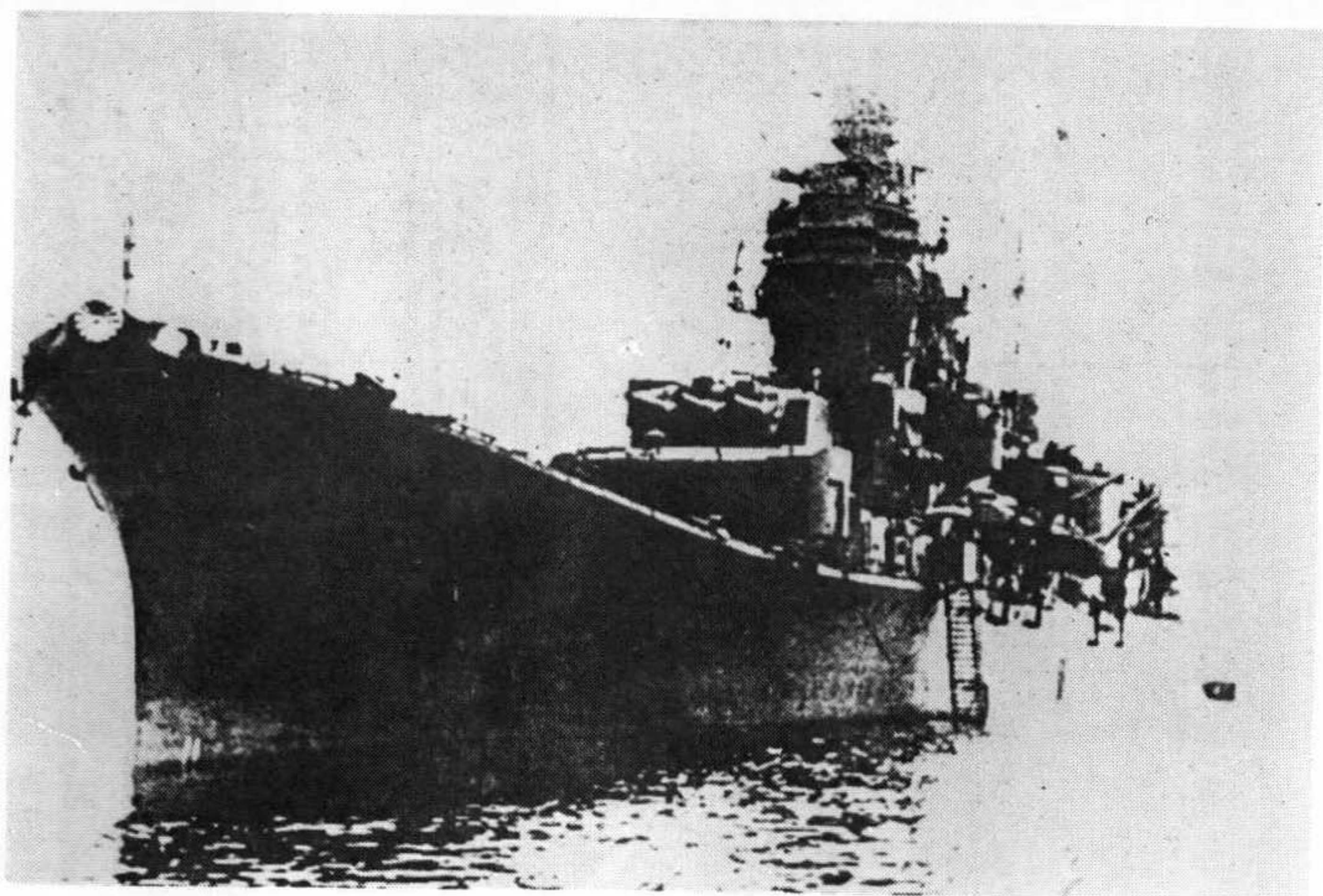
米機動部隊の北方誘致に任ずる小澤部隊旗艦瑞鶴
 (昭和19年10月25日，フィリピン沖海戦—Official U. S. Navy photo)



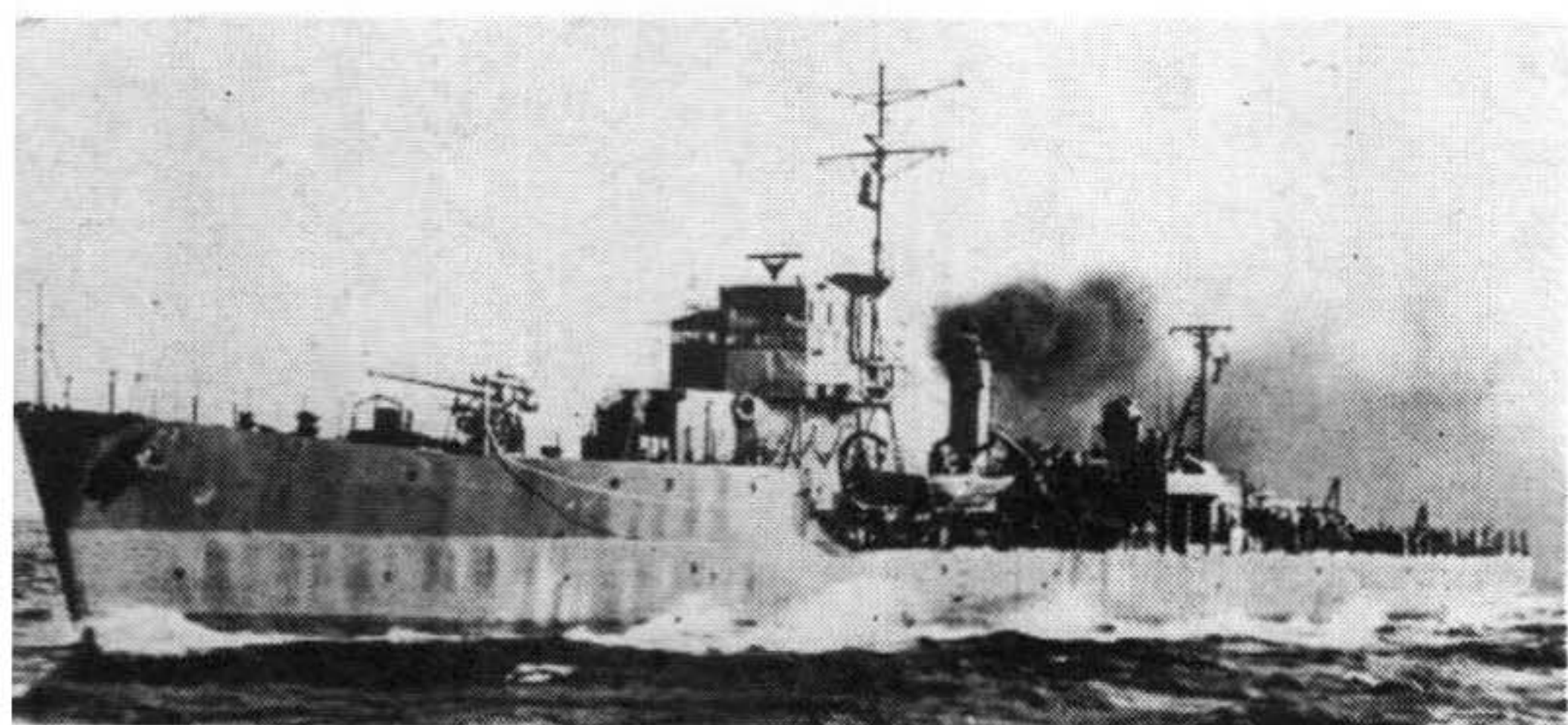
わが集中砲撃を受けつつある米護衛空母ガムビア・ベイ，円内はわが重巡利根
 (昭和19年10月25日，フィリピン沖海戦—Official U. S. Navy photo)



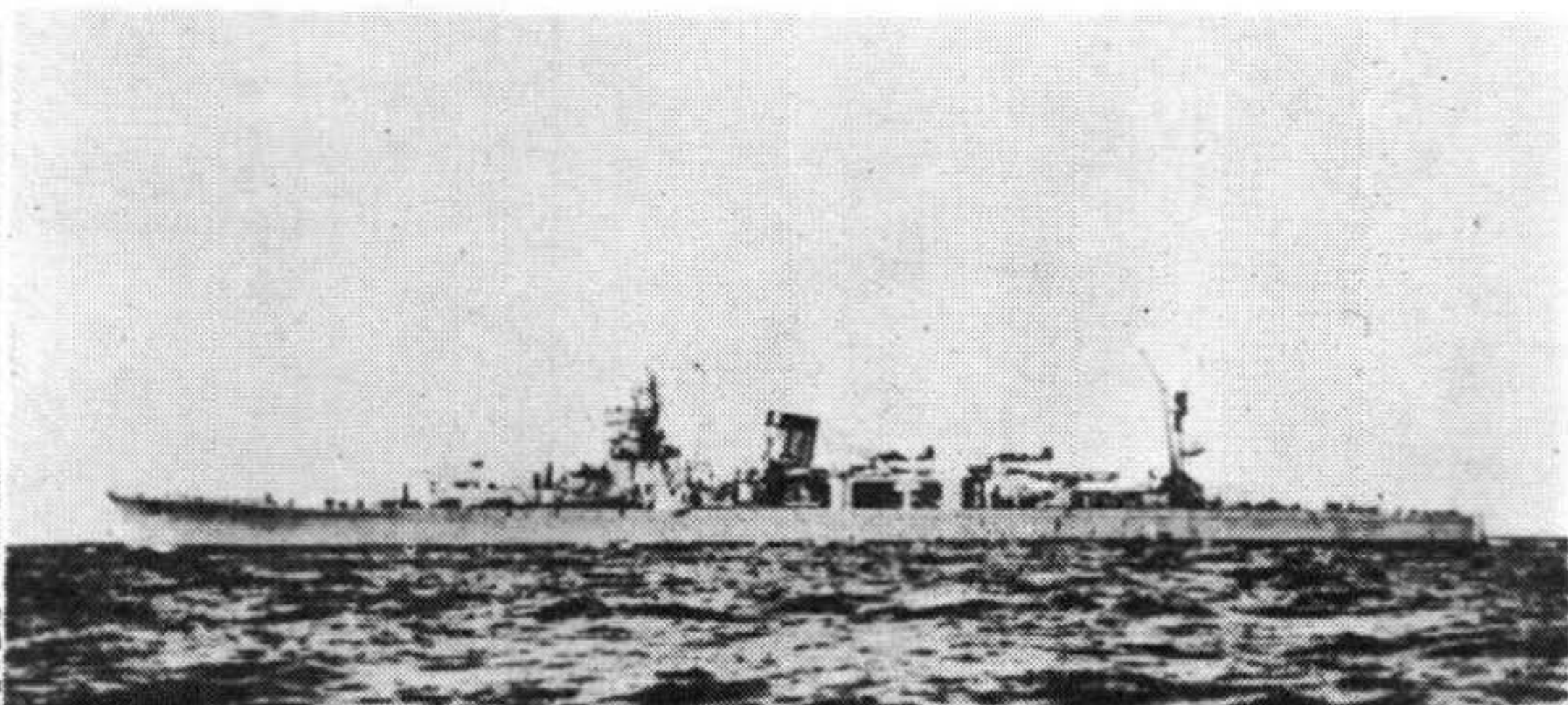
マニラ湾において米空母機の攻撃を受ける重巡那智
 (昭和19年11月5日—Official U. S. Navy photo)



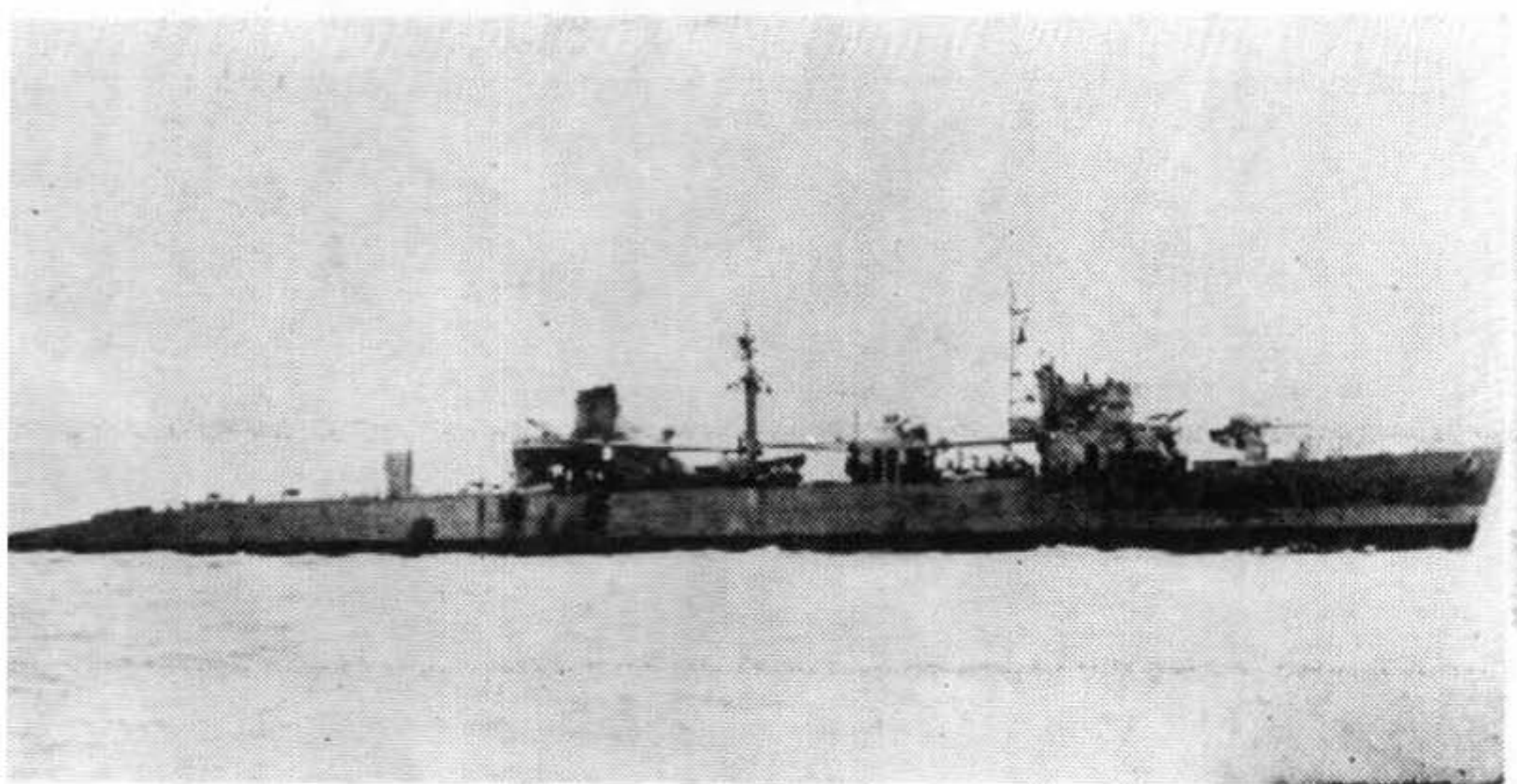
輕巡洋艦 大 淀



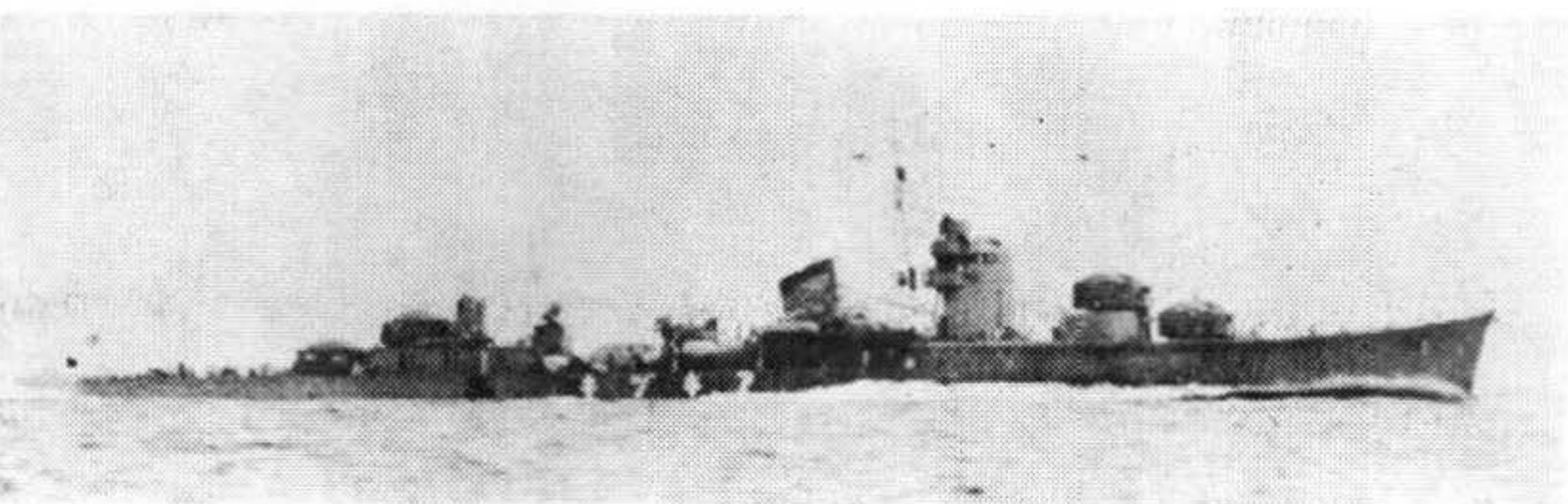
海 防 艦



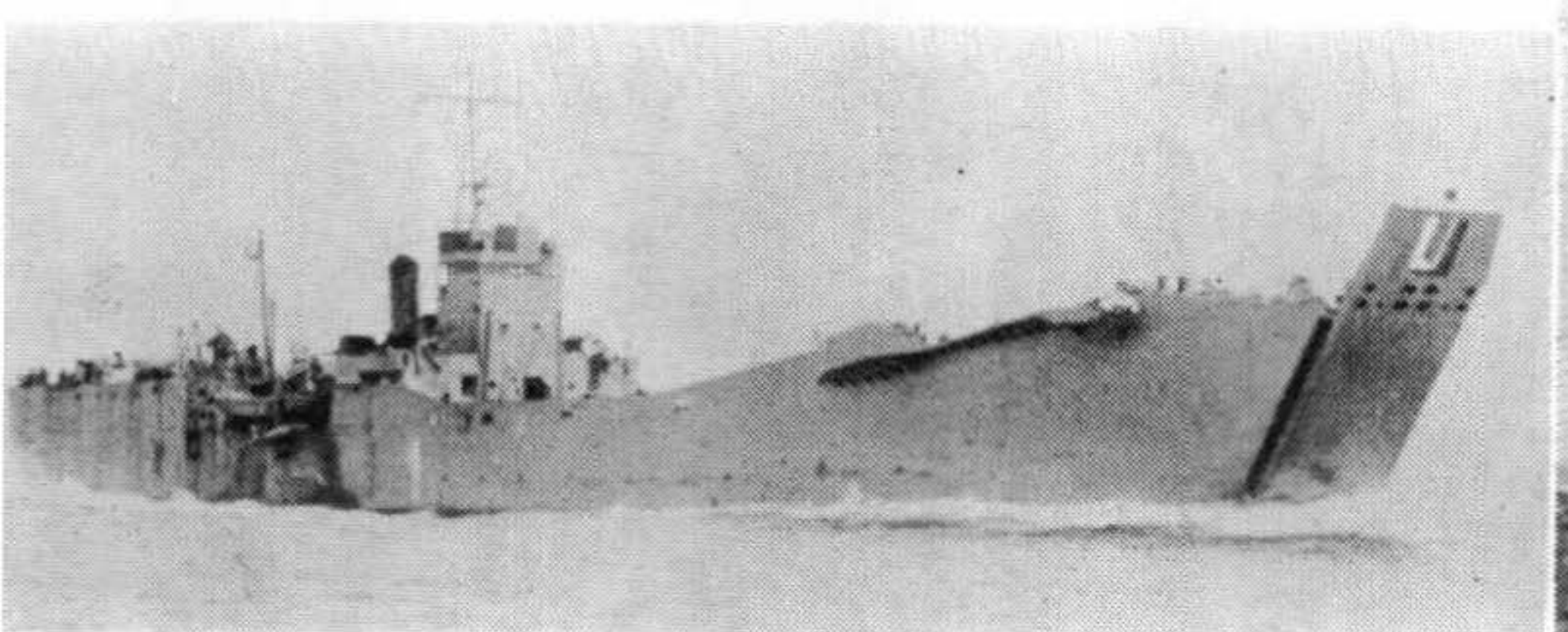
輕巡洋艦 矢 矧



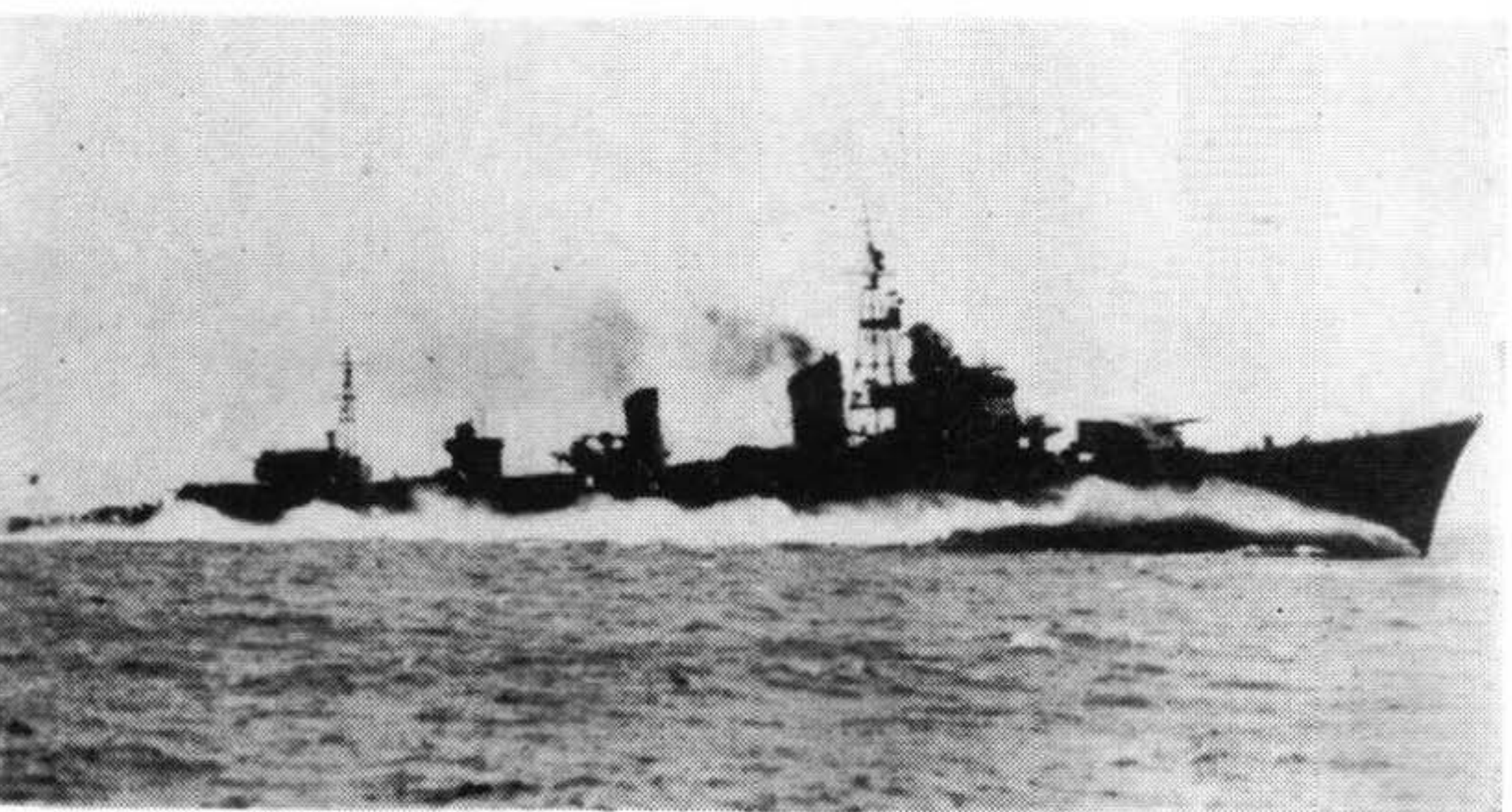
一 等 輸 送 艦



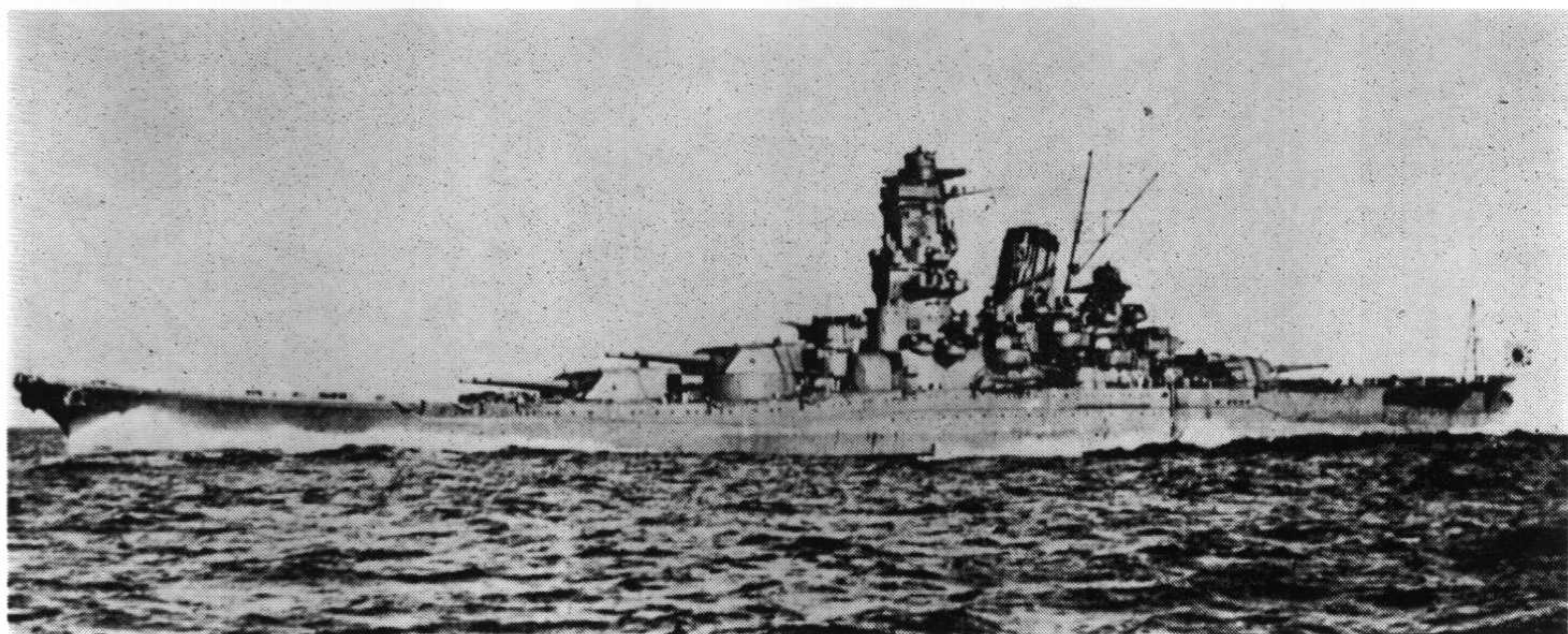
驅逐艦(防空) 秋 月



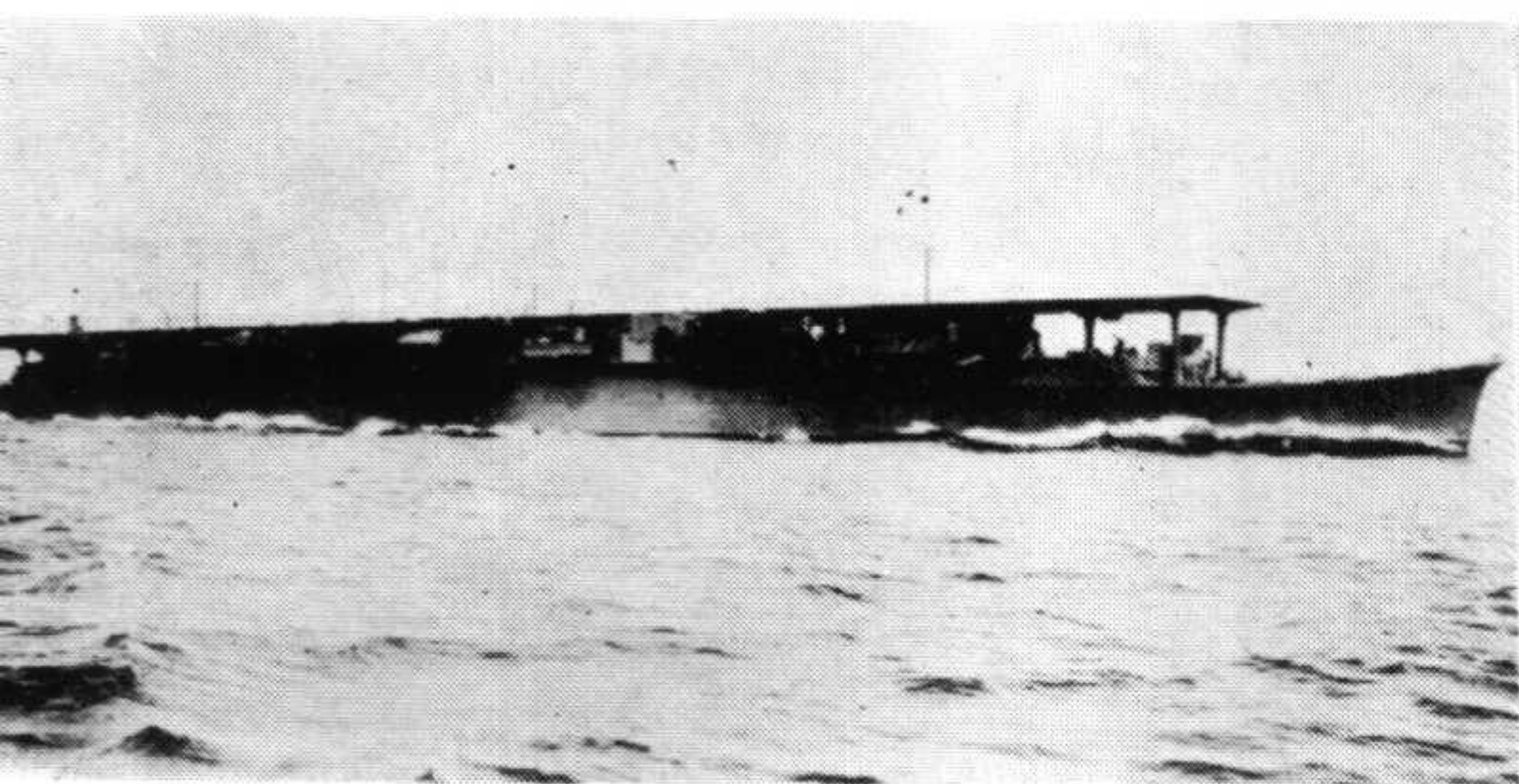
二 等 輸 送 艦



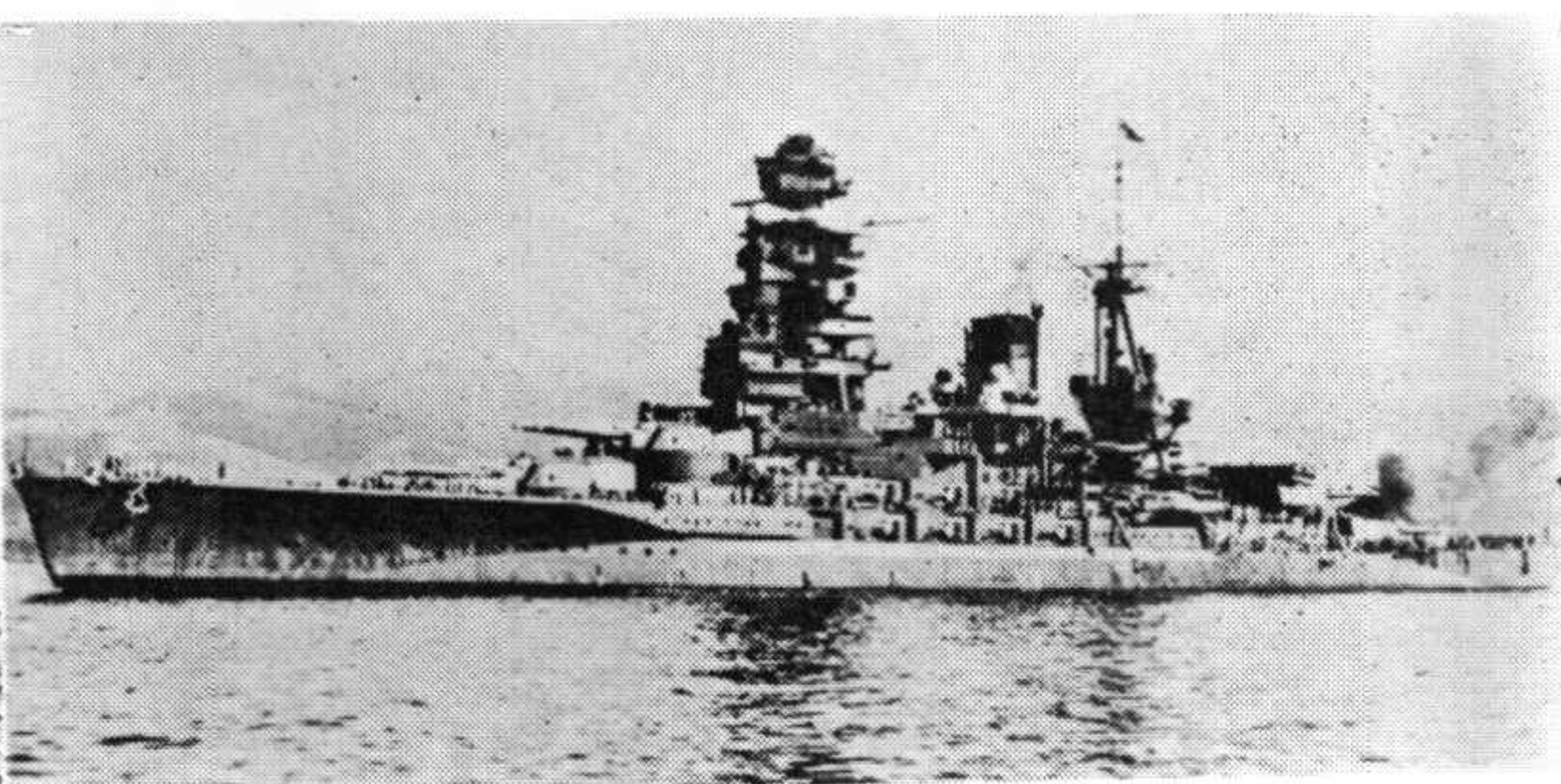
驅逐艦 島 風



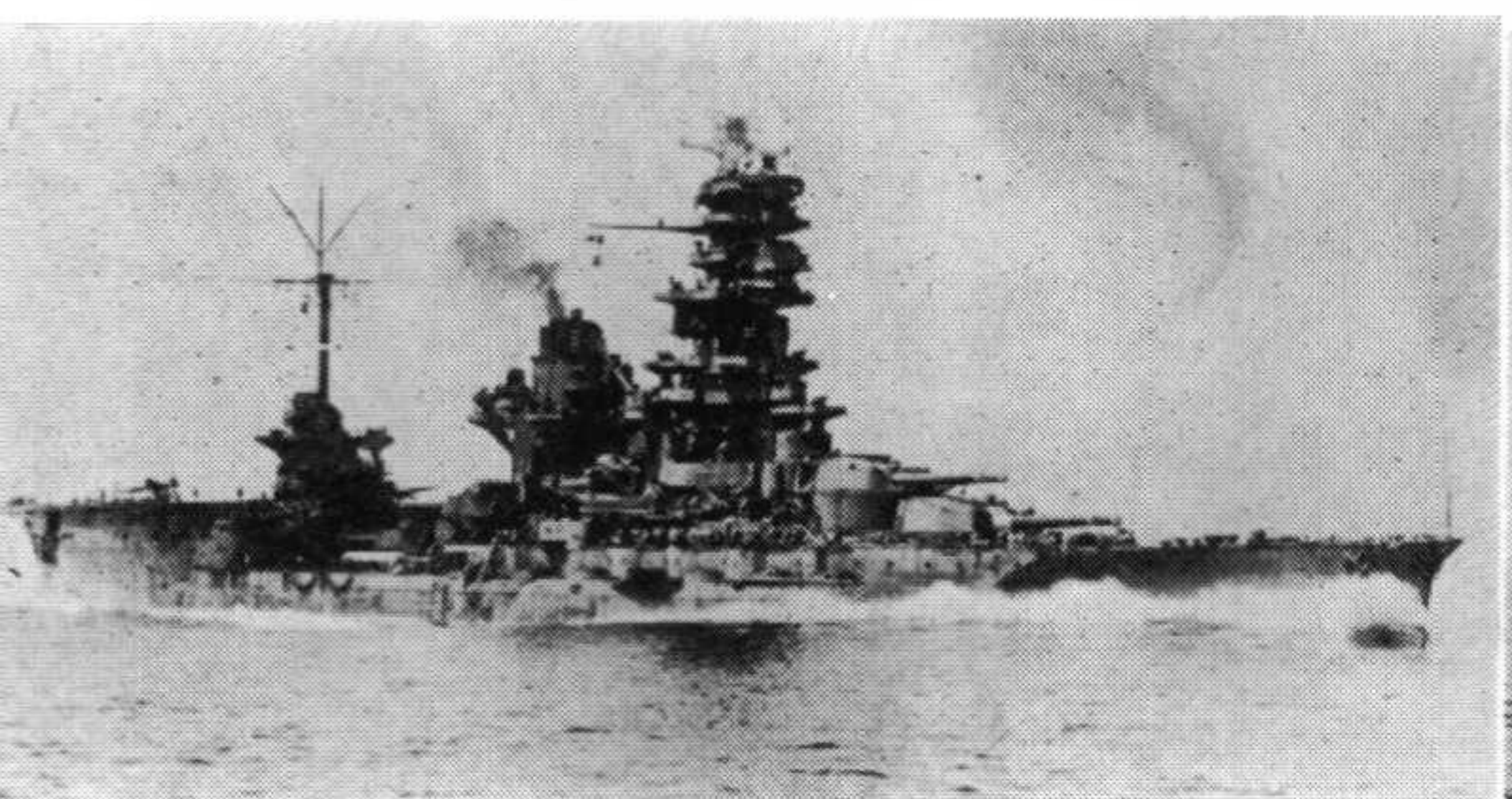
戰艦 大和



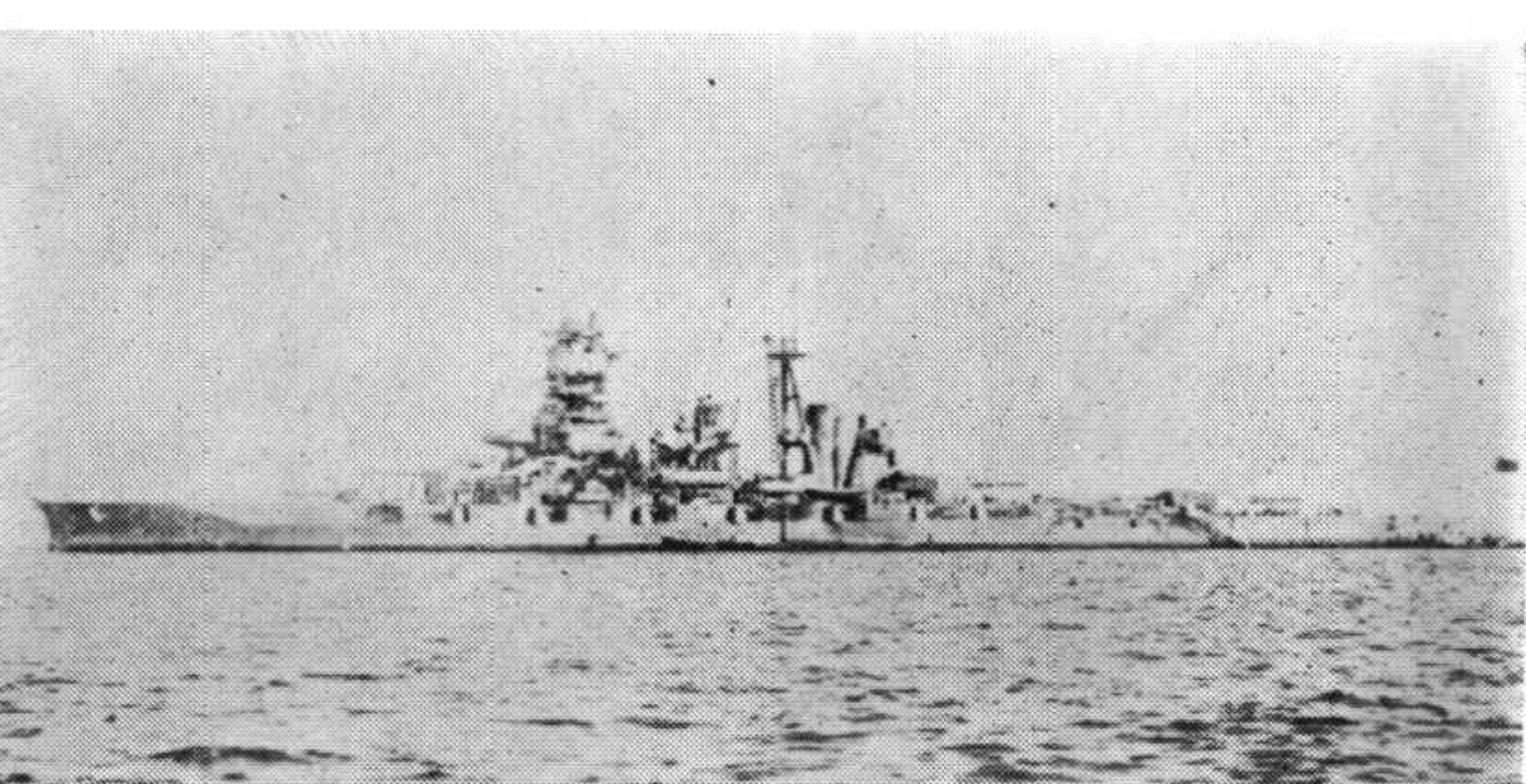
航空母艦 瑞鳳



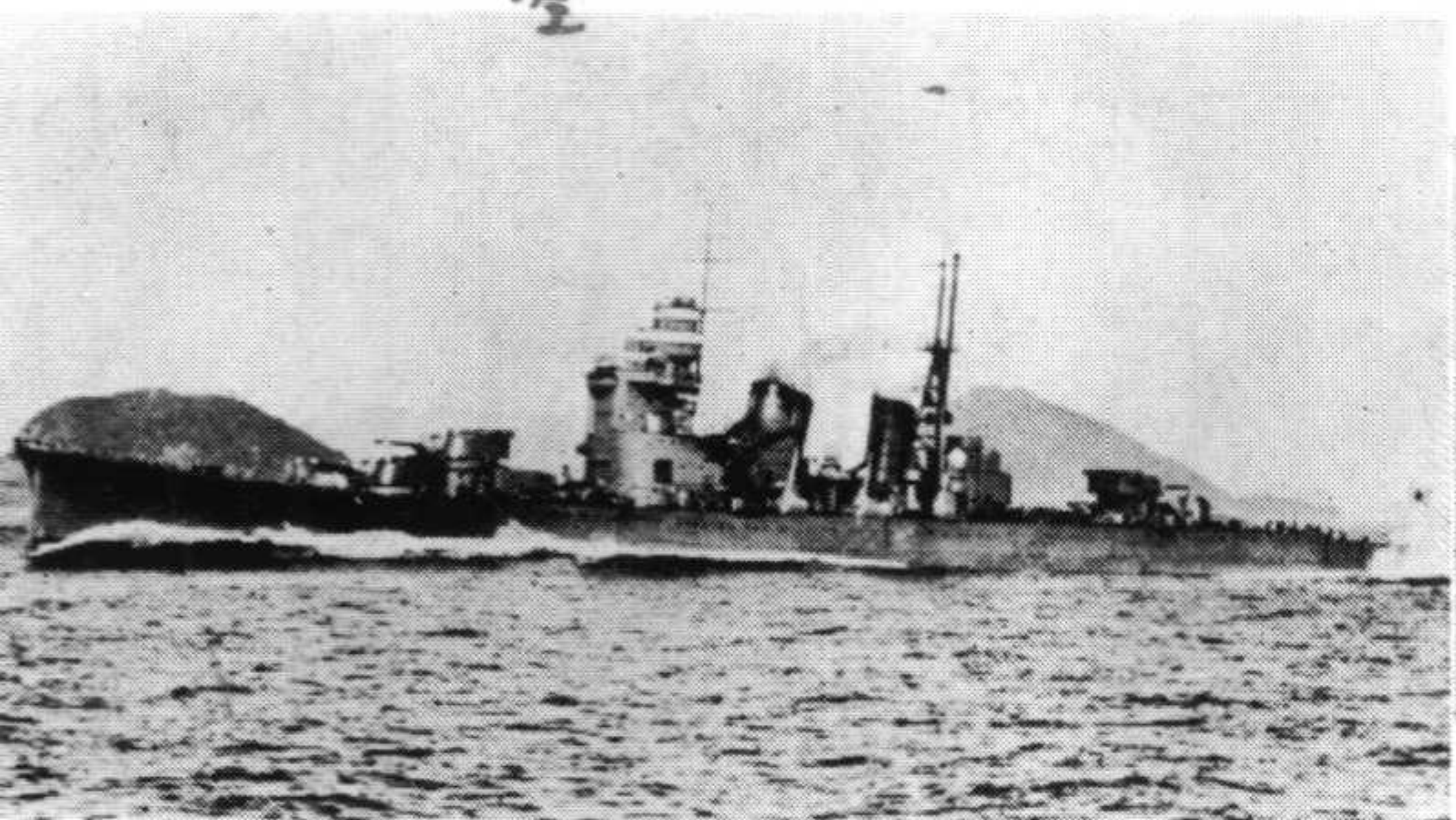
戰艦 長門



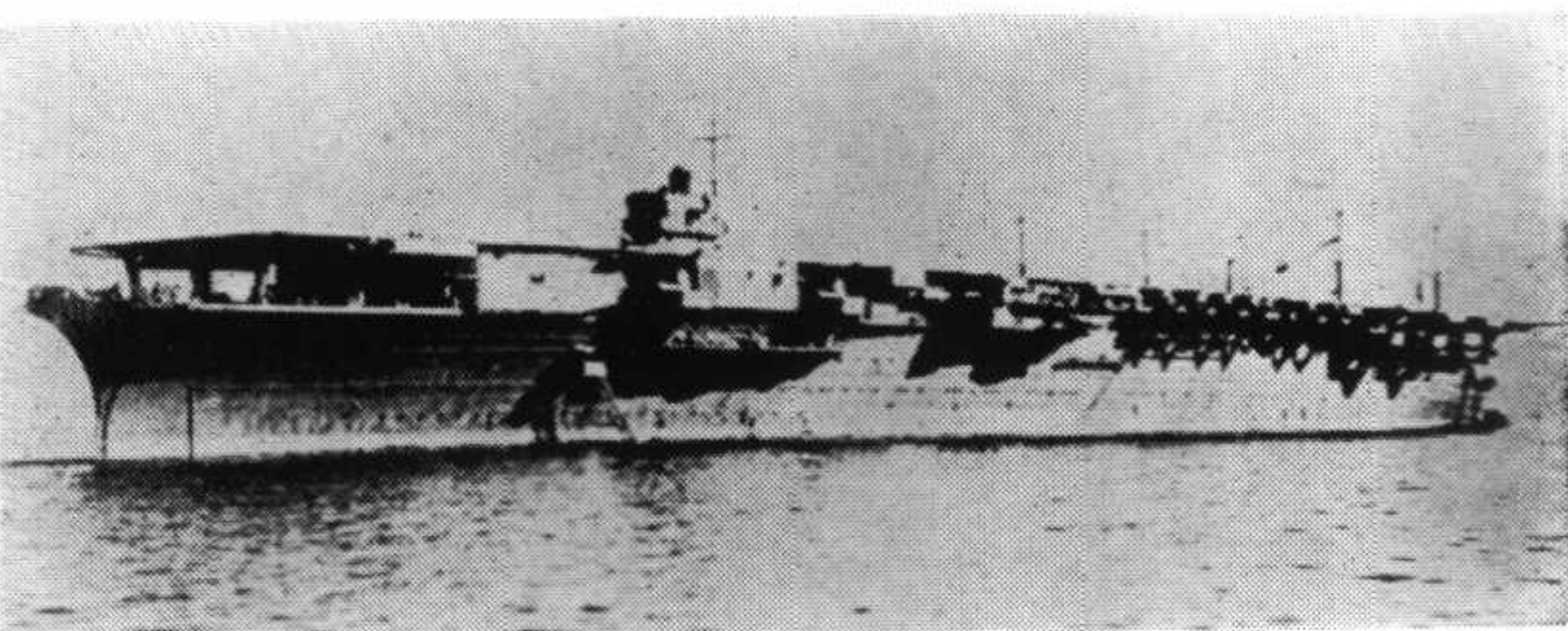
航空母艦 伊勢



戰艦 金剛



巡洋艦 那智



航空母艦 瑞鶴

序

戦史室が創設されて十数年、ようやくその成果を左記のとおり逐次刊行する運びとなり、その第五十六回として本書が刊行されることとなった。本書編纂に当たっては、自衛隊の教育または研究の資とすることを主目的とし、兼ねて一般の利用についても配慮した。

終戦時、大量の資料の消滅と散逸をきたし、そのうえ戦史室の開設までに十年間の空白を生じたため、戦史編纂の困難さは既往内外のそれに比して、筆舌に尽くしがたいものがあつた。ただ幸いにも関係方面の理解と、かつての当事者各位の熱誠あふれる協力とによつて、この刊行を実現し得たのであり、ここに改めて深く謝意を表する次第である。

記述に当たっては、紙面の関係などで割愛したもののも少くない。また、今後さらに新たな史料の収集によつて加筆修正を必要とするものがあることも予想される。引き続き、部内外の協力と叱正とを懇願してやまない。

本書は戦史編纂官河原崎勇、同吉松正博、同奥宮重一が研究したものを、吉松正博が整理執筆したものである。

なお、本書記述の内容に関する責任は戦史室長と執筆者のみにあることを特に付言する。

昭和四十七年五月

防衛研修所
戦史室長

島 貫 武 治

既刊・戦史叢書 (頭書の数字は配本番号)

- | | | | |
|----------------------------------|-----------------------------|-------------------------------|---------------------------|
| (1) マレー進攻作戦 | (18) 北支の治安戦<1> | (35) 大本營陸軍部<3>昭和十七年四月まで | (52) 陸軍の軍備と運用<1>昭和十三年初期まで |
| (2) 比島攻略作戦 | (19) 本土防空作戦 | (36) 沖繩・臺灣方面陸軍航空作戦 | (53) 満洲方面陸軍航空作戦 |
| (3) 蘭印攻略作戦 | (20) 大本營陸軍部<2>昭和十六年十二月まで | (37) 海軍捷号作戦<1>臺灣沖航空戦まで | (54) 南西方面海軍作戦―第二段作戦以降 |
| (4) 一号<1>河南の会戦 | (21) 北東方面陸軍作戦<1>アッツの五砦 | (38) 中部方面海軍作戦<1>昭和十七年太平洋戦争まで | (55) 昭和十七・十八年の支那派遣軍 |
| (5) ビルマ攻略作戦 | (22) 西部ニューギニア方面陸軍航空作戦 | (39) 大本營海軍部・聯合艦隊<4>第三段作戦前期 | (56) 海軍捷号作戦<2>フィリピン沖海 |
| (6) 中部太平洋陸軍作戦<1>マリアナ太平洋方面 | (23) 豪北方面陸軍作戦 | (40) 南太平洋陸軍作戦<3>ムンダサラモア | |
| (7) 東部ニューギニア方面陸軍航空作戦 | (24) 比島方面海軍進攻作戦 | (41) 捷号陸軍作戦<1>レイテ | |
| (8) 大本營陸軍部<1>昭和十五年五月まで | (25) イラワジ会戦―ビルマ防衛の破綻 | (42) 昭和二十年の支那派遣軍<1>三月まで | |
| (9) 陸軍軍需動員<1>計画編 | (26) 蘭印・ベトナム方面海軍進攻作戦 | (43) ミッドウエー海戦 | |
| (10) ハワイ作戦 | (27) 關東軍<1>対ソ戦備・ノモンハン事件 | (44) 北東方面陸軍作戦<2>―千島・樺太・北海道的防衛 | |
| (11) 沖繩方面陸軍作戦 | (28) 南太平洋陸軍作戦<2>ガダルカナル・ブナ作戦 | (45) 大本營海軍部・聯合艦隊<6>第三段作戦後期 | |
| (12) マリアナ沖海戦 | (29) 北東方面海軍作戦 | (46) 海上護衛戦 | |
| (13) 中部太平洋陸軍作戦<2>ペリリュー・アンガウル・硫黄島 | (30) 一号<3>廣西の会戦 | (47) 香港・長沙作戦 | |
| (14) 南太平洋陸軍作戦<1>ポートモレスビー・ガ島初期作戦 | (31) 海軍軍戦備<1>昭和十六年十一月まで | (48) 比島捷号陸軍航空作戦 | |
| (15) インパール作戦―ビルマの防衛 | (32) シツタン・明号作戦 | (49) 南東方面海軍作戦<1>―ガ島軍団作戦開始まで | |
| (16) 一号<2>湖南の会戦 | (33) 陸軍軍需動員<2>―實施編 | (50) 北支の治安戦<2> | |
| (17) 沖繩方面海軍作戦 | (34) 南方進攻陸軍航空作戦 | (51) 本土決戦準備<1>―關東の防衛 | |

続刊予告

- | | |
|------------------------|-------------------------------------|
| (61) ビルマ・蘭印方面 第三航空軍の作戦 | (57) 本土決戦準備<2>―九州の防衛 |
| | (58) 南太平洋陸軍作戦<4>―ライシシュハーフェン・ツルブタロキナ |
| | (59) 大本營陸軍部<4>昭和十七年八月まで |
| | (60) 中部方面海軍作戦<2>昭和十七年六月以降 |

まえがき

昭和十九年十月二十日、連合軍は中部フィリピン（中比）のレイテ島に來攻した。聯合艦隊は捷一号作戰計画に基づき、水上主力艦隊をレイテ湾に突入させ、一挙に攻略部隊を撃滅することにより連合軍の上陸企図の破砕を図った。レイテ湾突入には第一遊撃部隊（栗田―第二艦隊基幹）と第二遊撃部隊（志摩―第五艦隊）が任じた。突入日時は十月二十五日黎明と決定された。比島に集中の第五（大西）、第六基地航空（福留）部隊をもつて比島東方海面の米機動部隊を攻撃する一方、機動部隊本隊（小澤―第三、第四航空戦隊）をもつてこれの北方誘致を図り、その間に第一遊撃部隊等をレイテ湾に突入させるというのが聯合艦隊の決戦要領であった。

しかし基地航空部隊は臺灣沖航空戦における兵力損耗のため、決戦時、比島に集中できた兵力は実働三〇〇機にも満たなかった。このため、さきに航空兵力を陸上基地作戰に転用されて内海西部に待機中であつた機動部隊本隊は空母（四隻）全滅覚悟の四^{おとり}作戰に任じることとなつた。

十月二十四日、基地航空部隊は比島東方海面を行動中の米機動部隊に攻撃を集中したが機動部隊の全貌を捕捉できず、当時三群に分かれて行動していた機動部隊のうち北端の一群に攻撃を加え得たに過ぎなかった。このため同日シブヤン海を東進中の第一遊撃部隊は他の二群から集中攻撃を受ける結果となつた。

二十五日、基地航空部隊は総攻撃を企図したが米機動部隊を捕捉できなかった。この間、サマール島沖とエンガノ岬沖で二つの海戦が同時に行なわれた。第一遊撃部隊はサマール沖で幸運にも米護衛空母群に遭遇して砲火を交え、これに潰滅的打撃を与えたかに見えた。一方、エンガノ岬沖の機動部隊本隊は空母全滅の悲運に遭^あつたが、米機動部隊の北方誘致に成功した。しかしこの成功も無為に帰した。第一遊撃部隊がレイテ湾に突入しなかったからである。同遊撃部隊には機動部隊本隊の状況は何もわかっていなかった。大本營は、レイテ突入作戰に関連する一連の戦闘を

「フィリピン沖海戦」と呼称した。

フィリピン沖海戦の結果、大本營陸軍部はレイテ方面の情勢は我に有利と判断し、決戦方面をレイテに変更、決戦兵団の同地増援を決めた。聯合艦隊はこの輸送作戦を担当した。この作戦は「多号作戦」と呼称され、九次にわたって実施されたが、事実は全く大本營の判断に反し、結局、圧倒的に不利な条件下に強行のやむなきに至り、多大の犠牲を出して失敗した。

十二月中旬、連合軍はミンドロ島に上陸し、レイテ決戦は実質上挫折した。ミンドロ島に対して一部水上部隊による突入作戦（禮号作戦）が強行されたが、目立った戦果はなかった。

昭和二十年一月上旬、連合軍はルソン島のリングエンに上陸した。航空兵力を損耗し尽くした基地航空部隊は比島から臺灣に撤退した。

本書は以上の経過について記述するものであり、特にフィリピン沖海戦を詳述した。なお連合軍のルソン来攻以後の作戦経過については戦史叢書「南西方面海軍作戦―第二段作戦以降」に譲る。

凡 例

- 一 日時は一般に日本中央標準時によった。
- 二 時刻は一七〇〇、あるいは午後五時のように二つの表現方法を用いた。
- 三 部隊名称については左のように省略した。

正式名称 省略名称

第〇航空艦(戦)隊 〇航艦(戦)

第〇水雷(潜水)戦隊 〇水(潜)戦

第〇〇〇海軍航空隊 〇〇〇空

攻撃(戦闘、偵察)第〇〇〇飛行隊 攻(戦、偵)又はK(S、T)〇〇〇

第〇(特別)根拠地隊 〇(特)根

なお、本文中にも適宜省略名称を注記した。

- 四 航空機及び艦船名称については左のように省略した。

正式名称 省略名称

航空機

零式艦上戦闘機 零戦

紫電局地戦闘機 紫電

月光夜間戦闘機 月光

天山艦上攻撃機 天山

九九式艦上爆撃機

九九艦爆

彗星艦上爆撃機

彗星

銀河陸上爆撃機

銀河

一式陸上攻撃機

一式陸攻又は陸攻

二式艦上偵察機

二式艦偵

彩雲艦上偵察機

彩雲

陸軍四式重爆撃機

四式重爆

百式司令部偵察機

百式司偵又は司偵

艦船

伊(呂)号第〇〇潜水艦

「伊(呂)〇〇潜」

第〇〇号海防艦

(輸送艦、駆潜艇)

「海防(輸、駆潜)〇〇号」

五 日本軍の「聯合艦隊」と「聯隊」については、固有名詞として「聯」の字を用いた。

六 引用原文中、「筆者補注」は「」を用いた。

七 () 内番号は史料の出所を示し、末尾に一括掲記した。

目次

序

まえがき・凡例

本書記述までの戦況概要

捷号作战計画 (1)

陸海軍航空統合運用の問題 (2)

兵力整備 (3)

聯合艦隊捷号作战要領 (5)

聯合艦隊の編制 (6)

連合軍のペリリユ一、モロタイ来攻と

米機動部隊の比島来襲 (12)

決戦実施方面の概定 (13)

臺灣沖航空戦 (14)

米機動部隊の沖繩来襲 (十月十日) (14)

米機動部隊の臺灣強襲 (十月十二、十三日) (15)

米機動部隊、避退を始む (十月十四日) (16)

敵損傷艦部隊の発見 (十月十五日) (18)

聯合艦隊司令部、敵猛追を下令 (18)

敵有力空母部隊発見さる (十月十六日) (19)

目次

第一編 フィリピン沖海戦

第一章 連合軍のレイテ来攻と捷一号作战発動

7

三

三

一

一 連合軍のスルアン島上陸

(十月十七日) ……………三

寝耳に水の、敵スルアン島上陸 (21)

海軍見張所の敵上陸報告 (21)

レイテ戦況判明せず、半信半疑の敵上陸 (22)

聯合艦隊、捷一号作戦警戒を発令 (24)

聯合艦隊司令部の敵企図判断 (24)

捷一号作戦警戒の発令 (25)

第一遊撃部隊に対する油槽船の手配 (26)

機動部隊本隊に対する指導 (27)

潜水部隊に対する出撃下令 (29)

大本營、決戦実施方面を予告 (30)

二 捷一号作戦発動さる (十月十八日) ……三〇

レイテ方面の戦況―敵本格的な上陸開始か (30)

聯合艦隊作戦指導の腹案 (31)

大本營、比島方面決戦実施を指示 (33)

通信情報判断は本格的攻略作戦

とは認めず (33)

決戦実施方面の決定 (33)

油槽船問題、俄然紛糾す (36)

三 連合軍のレイテ上陸と、わが初期

邀撃戦(十月十九日―十月二十三日) ……三六

レイテ島への本格的な上陸 (39)

十月十九日の状況 (39)

十月二十日の状況 (41)

十月二十一日の状況 (42)

十月二十二日の状況 (43)

十月二十三日の状況 (43)

現地航空部隊の初期邀撃作戦 (44)

十月十九日の状況 (44)

十月二十日の状況 (45)

十月二十一日の状況 (46)

十月二十二日の状況 (46)

十月二十三日の状況 (46)

四 レイテ決戦準備 ……三七

聯合艦隊司令部の決戦準備指導 (47)

捷一号作戦発動前における作戦指導の概要 (47)

決戦準備程度の照会 (48)

決戦要領の発令 (49)

タクロバン攻略に対する聯合艦隊

第二章 決戦部隊の展開

一 第一遊撃部隊

出撃—ブルネイ進出 (61)

ブルネイ進出を下令さる (61)

油槽船の手配 (62)

出撃計画 (63)

ブルネイ回航 (65)

聯合艦隊司令長官の直率下におかる (65)

艦隊燃料補給 (66)

油槽船未着、応急措置の燃料補給 (66)

補給部隊の入港 (67)

レイテ突入計画と作戦打ち合わせ (68)

突入計画 (68)

進撃航路の選定 (69)

司令部の企図判断 (50)

勅語の下賜と聯合艦隊司令長官の訓示 (51)

比島海軍部隊の決戦準備 (51)

海上機動反撃準備 (52)

南方軍の計画まだ確定せず (52)

三転四転の陸軍増援計画、南西方面艦隊を

困惑さす (54)

第二遊撃部隊、レイテ突入に決す (55)

第十六戦隊をもつてする

海上機動反撃作戦準備 (56)

航空総攻撃準備 (58)

陸軍航空決戦準備の概況 (60)

二 機動部隊本隊

出撃部隊の陣容 (71)

作戦打ち合わせ (72)

補給部隊の編成と行動 (73)

出撃準備の下令 (75)

集結 (78)

第三航空戦隊 (78)

第四航空戦隊 (78)

十一水戦 (78)

第三十一戦隊 (78)

飛行機隊の収容 (79)

補給部隊の編成 (80)

作戦要領 (82)

出撃 (85)

十月二十一日の作戦行動 (87)

飛行索敵の開始 (87)

敵潜水艦に触接さる (87)

十月二十二日の作戦行動 (88)

早朝、敵潜の襲撃を受く (88)

敵機動部隊情報を受く (88)

難波の洋上燃料補給 (90)

戦機切迫す (91)

三 第二遊撃部隊……………三

敵のスルアン上陸と任務変更 (93)

再度の任務変更―レイテ湾突入に決す (95)

志摩長官の意見具申 (95)

陸軍計画の変転、任務の帰趨

再び定かならず (97)

駆逐隊を割かる (97)

レイテ突入に決定さる (98)

レイテ突入命令の受領 (100)

コロン湾における補給と出撃計画 (101)

四 第五基地航空部隊……………三

索敵機、十九日に至り敵全貌を偵知す (102)

神風特別攻撃隊の編成 (106)

航空艦隊の実働兵力、わずかに四〇機 (106)

大西中将の体当たり攻撃決意 (107)

海軍部、大西中将の決意に了承を与える (108)

体当たり攻撃実施を決断す (109)

航空艦隊首脳に決意を表明す (110)

実施航空隊に直接はかる (110)

苦悩の人選 (111)

訓示 (114)

編成の発令 (114)

出撃、決戦日までの空母撃破成らず (115)

五 第六基地航空部隊……………二六

比島進出準備 (116)

兵力整備の急速実施を迫らる (116)

捷一号作戦発動と訓示 (118)

決戦予定の発令 (118)

敵情判断 (119)

追撃戦の打ち切り (120)

T攻撃部隊を除かる (121)

兵力整備、容易に進捗せず (122)

比島進出 (125)

計画 (125)

進出 (128)

六 先遣部隊 一三

第三章 不吉の十月二十三日 一三七

一 第一遊撃部隊主隊、

パラワン水道の悲劇 一三七

ブルネイ出撃 (137)

暁の被雷撃―第四戦隊、一挙に戦力を喪失(140)

敵潜電波を探知、警戒を厳にす (140)

旗艦愛宕の被雷沈没 (141)

「高雄」の被雷 (144)

第一戦隊司令官の措置 (144)

「摩耶」轟沈す (145)

混乱からの事態収拾 (146)

第二部隊、危険海面を突破 (147)

第一戦隊司令官、一時艦隊指揮を

比島方面全力出撃の下令 (129)

乙及び丙潜水部隊の編成 (130)

捷一号作戦の発動と新散開配備 (132)

命ぜらる (147)

旗艦を「大和」に変更 (149)

「高雄」、ブルネイに回航 (151)

付記 米潜水艦の戦闘状況 (152)

二 機動部隊本隊の作戦行動 一五五

頻繁に敵潜水艦を探知 (154)

第一遊撃部隊の悲報入電と

艦隊司令部の状況判断 (156)

三 基地航空部隊、

初日の総攻撃に失敗す 一五七

第四章 Y日・航空総攻撃日―十月二十四日 一五九